

善じいのウグイス ~酒井明 説話集 39※~

善じいはそれはそれは小鳥が好きでした。いろいろな小鳥を飼って楽しんでいました。ホオジロ、メジロ、ルリやヒバリ。ヒバリは丸くて背の高いかごの中でした。ウグイスはメジロよりすこし大きいかごでした。

善じいはときどきお弁当を持って山を歩きます。人のめったに入らない茂った山にも行きました。きれいなルリは人里では見かけることが出来ません。

れんげの田圃で空を見上げながら坐ることもありました。ヒバリは空から舞いおりてさっと巣に帰ることはできません。離れた所において、あたりの様子をたしかめてから巣にはいります。あたりは一杯れんげの花ざかりです。でも決して油断はしないのです。

春の山をまわる善じいはときおり、巣子をつれて帰ることがありました。巣からはなれる前の小さなひなことです。でも善じいの連れて帰るひなは、親鳥が育てるよりもっとたしかに育ちました。山では他の鳥やけものや蛇におそれることが多いのです。善じいは自分の連れて帰るひなどりはどうしてやれば丈夫に育つか知っていました。

巣子はどんどん大きくなっています。大きくなりながら善じいのお気に入りの親鳥達の鳴き声を毎日聞きます。そのうちやがてひな達も、親鳥達と同じ様にみんないい声で鳴くようになるのです。

山仕事の人達が言いました。

「善じいよう、めっそによう鳴くうぐいすが、松尾峠で鳴きよるぞ」
善じいはおとりをつれて峠に登って行きました。善じい程の人になると気に入ったものより他はなりません。峠をあちこちしましたが山仕事の人達が言ったような鳥に出会うことはできませんでした。

おとりのうぐいすはかごを風呂敷でくるまれ、背負われたり、しっかりさげられたりして連れて行かれます。善じいにすれば一番大事なお供ですからそれはそれは大切にします。

「どんな鳥でもおとりの役をしてくれるとありがたいこっちゃがのう」
善じいの言う様に、おとりは気性がはげしくてどこでも平気で鳴く鳥でないと駄目なのです。

うぐいす仲間にもちろんとした領分があって、気弱な鳥は他の領分では思い切って鳴けないです。

善じいはかごの中に向って話しかけました。

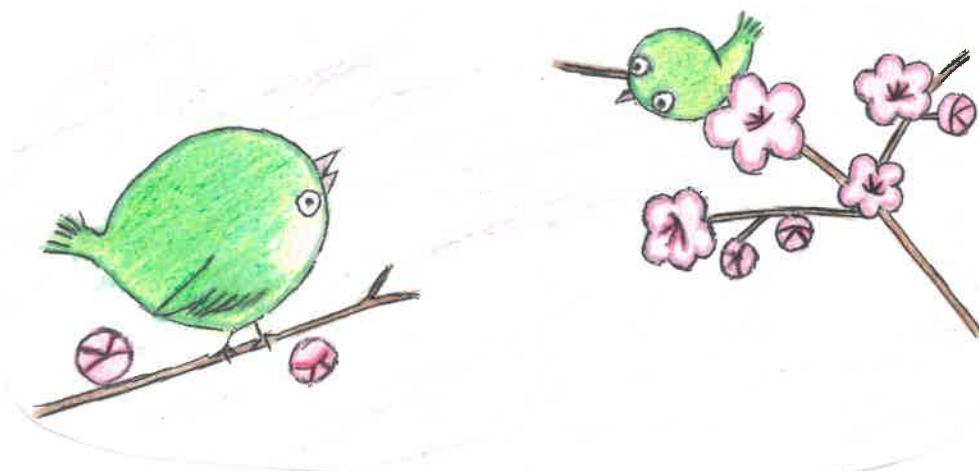
「さあ、いっとき山の影色を眺めるか。思い切りよく鳴いてみるのもよかろうて」

そう言いながらかけた風呂敷をはずしてやりました。胸を張っておとりは気持ちよさそうに鳴き始めました。

しばらくすると一羽のウグイスがさあっと飛んできました。ちょっと様子をうかがってかごに向ってとびつきました。中のおとりと外のウグイスは、かごをはさんで羽根をちらしてたたかい始めました。木の枝にかごをつるした善じいはすこし離れて一服していましたが、それと気付いてあわてました。

ようやく二羽をひきはなし風呂敷をかぶせた善じいは
「どちらの鳥にもすまんこっちゃ。近所に他のウグイスがある気配もなかったのでついつい油断したのが悪かったのう」
ことわりを言いながらかごをさげて歩きだしました。とりもちがしけられていなかったのが幸でした。

その善じいも今ではすっかり年老いて山歩きもやめてしまいました。



ウグイス科ウグイス

野生の動物は勝手にとてはいけないように
現在では法律で保護されていて、捕獲、飼育の許可が必要です。

ウグイスはメジロなどと一緒に、日本で昔から飼育されてきた代表的な野鳥と言えます。
山では木の害虫などをさがして食べています。

ヤブウグイスなどと呼ばれる寒中のウグイスは、人の手のとどく様な所でチャッチャッと鳴きながら虫をさがしますのでよく観察することが出来ます。

※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会（当時）長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から順次「酒井明説話集」として公開してまいります。